

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏 名 船守 美穂
(戸籍名 関 美穂)

本論文は、グローバル社会における高等教育機関と学術情報流通の動向を調査し、高等教育機関が直面している課題の変遷のメカニズムを分析している。大学に対する多様な要請の背景を国内外の資料に基づいて調査して、大学の在り方を変革する必要性が生じていることを俯瞰的に示し、大学運営主体に対して留意すべき観点を提言している。またデジタル化とデジタルトランスフォーメーション（DX）の作用を分析して、大学の未来像形成における役割について考察している。

論文はⅣ部構成で全8章からなっている。序章は問題設定とアプローチを説明している。アプローチには二つの特徴がある。一つは、2012年から2020年にかけて執筆された250報以上の大学関連のニュース記事の一つずつ分析することで、具体的な事例を踏まえつつ俯瞰的に現代的な論点を抽出し、未来志向の検討を行っていることである。もう一つは、多岐にわたる課題に共通するメカニズムに着目し、それを意思決定に活用することである。これに基づき第1章では、大学が抱える代表的な問題を指摘したうえで、それらへの対応を迫られている「大学運営主体」を定義している。そして、21世紀における社会の動きに対応した高等教育と学術の変革の方向性を説明することにより、広範な問題に取り組む大学運営主体にとって羅針盤となるような方向性を示すことを、本研究の目的に据えている。

第Ⅱ部は第2～4章からなり、21世紀の高等教育機関が抱える問題を段階的に分析している。第2章では、対象とするデータの範囲を定義したうえで、それをニュース及び論点の抽出、その分類、背景と外部環境・アクター・アジェンダという三つのメタデータの付与、メタデータに基づく包括的な分析、そして高等教育に対する洞察の検討という手順で分析したことを説明している。第3及び4章は、分析結果の詳細な報告である。まず、一見独立しているように思える教育・研究・大学運営に関する種々の課題が、(Ⅰ)競争フェーズ、(Ⅱ)歪みが出出して管理されるフェーズ、(Ⅲ)大学自身が管理を強化するフェーズ、(Ⅳ)新たなパラダイムに向けて模索するフェーズ、という四段階で共通的に整理しうることを示している。そして、新たなパラダイムの方向性を、①多様性を前提とした高等教育システムの再構築、②社会に通用する高等教育の構築、③オープン性とデジタル技術の可能性の模索、④社会人等これまで高等教育に関わらなかった層の受け入れ、⑤競争パラダイムから協調パラダイムへの転換、の五項目に整理しうることを示している。また、大学に対するデジタル化とDXの作用を多角的に分析し、これらが人々の協働を可能にし、新たなパラダイムに要求される条件を満たしうることを議論している。

第Ⅲ部は第5及び6章からなり、課題の変遷のメカニズムに基づいて大学運営主体への提言を取りまとめている。まず、四つのフェーズが共通的に表れる原因として、高等教育のマス化及びユニバーサル化から時差を持って現れる「研究のマス化」という新たな概念を提示している。これは社会において大学卒業生の割合が増加するにつれ、社会と学術界の距離が縮まり、大学の研究活動に

対する要求が多様化、弾力化し、非構造的なものになる現象だと説明されている。また研究のマス化に伴伴する事象として、研究の学際化や社会的インパクトを求める動き、研究成果のオープン化、研究不正防止のための取り組み等が分析されている。そして、多様化する研究者像を包含する大学と社会の連携のために要請されている事項と、そのためにデジタル技術が果たす役割が考察されている。また、社会を向いた教育・研究の再設計の事例として、原子力分野を含む専門職教育課程や社会連携講座の仕組みについて調査し、その効果性について検討している。

第Ⅳ部の第7章は本研究の結論であり、近未来の大学における高等教育のアンバンドリングの可能性がまとめられている。高等教育と学術研究の双方におけるアンバンドリングとリバンダリングにおいて守るべき価値を示すとともに、専門職人材によるオープンな学習コミュニティ、デジタル化とDXがもたらす可能性、地域連携等を例示して、高等教育と学術が創出すべき価値についてとりまとめている。そして、問題意識と対応力のある人材の交換、知の体系化と制度化された教育プログラム、人材の専門性に裏打ちされた解放の発見とソリューションの制度化等が連環する、大学と社会のオープンコラボレーションと制度化の循環システムを提案している。

本論文は、原子力分野をはじめとする総合工学及び工学教育に貢献するところが少なくない。よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。